

芸術の美は所詮、市民への奉仕の美である。

(「葉」 昭9)

仮に、文学が芸術という意味をもち、またそれが美という価値をもつとするなら、その価値は、読者が自らその作品(芸術)の中に見出す面白さでしかない。作家は、ただ作家であるというだけであり、それ以上でもなければ、それ以下でもない。作家が芸術を殊更なものと思い込んではいない。かといって、読者もまたこれを侮るべきではない。読者がその中に作者の「心尽くし」を汲み取れば、その芸術は面白く、必ず美しいはずである。「奉仕」とは、そういう芸術家の拝跪の姿勢を指す。

われは山賊。うぬが誇をかすめとらむ。

(「葉」 昭9)

ここで太宰は自己卑下の弁法を用い、自らの文学表現を山賊行為に喩えている。別のところでは「路傍の辻音楽師」「善蔵を思ふ」とも「芸術は、権力を得ると同時に、死滅する」(同)とも言っており、いわば、見世物の芸に徹するプロの気概と、文士などとは口にも出さぬ文学者のアマチュア精神の必要性を、この警句は謳っている。芸術家を含め「名士」なる者の陥りやすい無意識の驕りを内側から衝く、いかにも太宰らしい「両刃の剣」にも似た文学の方法が彷彿とする。

罪、誕生の時刻に在り。

(「二十世紀旗手」 昭12)

「生れて、すみません」という例の名言とともに同一篇中に刻まれた。これらの警句は、当該作品の内容以上に読者へ鮮明な印象を与え、作者晩期の「人間失格」とも何かとイメージをダブらせるものがある。作品史的には、前期と後期の思想の始末のつけ方に、螺旋状に相通い合うものを見たい。意味は、いわゆる人間存在の罪＝原罪に近いものと見てまず間違いないが、これを言葉による語る行為と、意志による生(死)の行為に重ねてみると、太宰文学の輪郭がよく見えてくる。

富士には、月見草がよく似合う。

(「富嶽百景」 昭14)

富士といえば日本一、日本といえばフジヤマという通念のようなものがある。それはそれで間違はなく結構だが、この種の通念は、屢々人々の眼を奪い、その意味を誇大化させて疑うことを忘れさせる。天下に名だたる富士、とは少し尊大に過ぎはしないか、と作者は訝りたくなる。見れば、道端にさりげなく咲く名も無いに等しい一輪の草花。その健気で小さな美しさは富士とは対照的だが、そうであればこそ、逆に二つは見事に釣り合い、かくあるべき風景の構図を映し出して見せる。

結論。芸術は、私である。

(「東京八景」 昭16)

吹き抜けるように過ぎた十年の東京生活を顧み、これを描くべく「胸の中のアルバムを繰ってみた」が、「芸術になるのは、東京の風景でなかった。風景の中の私であつた。芸術が私を欺いたのか。私が芸術を欺いたのか。結論。芸術は、私である」という。単なる自画像とも私小説とも異なる、太宰文学特異の語法を象徴する一句である。語る者と語られるもの、語ることと語られたことなどの相互同一化が、既に小説の言葉として定着し即ち異化されてしまっている現実を重視したい。

信じるところに現実はあるのであつて、現実決して人を信じさせる事が出来ない。

(「津軽」 昭19)

ここという「信じる」とは、「私の生きかたの手本とすべき純粋の津軽人を捜し当てたくて津軽へ来た」とか「現実には、私の眼中に無かつた」とあるように、《かくあるべしと信じる自らの眼を通して、あるがままのものを見る》といった意味である。すでに相対化された自らの眼を通して、自然に選り取られる現実だけを「信じる」と言うのだ。それ故、《信》には違いないが、決して盲目的ではなく、片目を瞑りつつ、他方、嘘でない現実をしっかりと見ている、という言い方ができる。

我等の生活は自給自足のアナキズム風の桃源である。　（「苦悩の年鑑」昭21）

ここには、戦後の太宰における、最小で最大限度の思想的な生活信条の骨格が示されている。いわば、イデオロギー的に傾斜したり徒党的・内輪的に与する一切のものの無効性を指摘する、そういう思想の必要性を説いている。人のあらゆる価値観には必ず先入観が潜んでおり、それはその個人において進んで相対化される必要がある。人を色分けしない、人を束ねて見ない、そして自らも断じて衆とは与しないという、人間的「個」の尊厳と自峙を謳う太宰自発の無頼派宣言である。

父はどこかで、義のために遊んでゐる。
地獄の思ひで遊んでゐる。

（「父」昭22）

「義とは、ああやりきれない男性の哀しい弱点に似てゐる」ともあり、「家庭の幸福は諸悪の本」（「家庭の幸福」）の名言とともに太宰の思想を約言した警句である。身内というウチに対する他人や公というソト、そのソトにおいて人の平らかさを生きたいとなれば、ソトもウチのように、またウチもソトのように扱わねばならぬ。殊に愛や誠の名を借る人の平らかさなどは、矛盾以外の何ものでもない。博愛が本質的に不可能なように、大義滅親（大義のためには自分の肉親をも省みないこと）も不可避の理である。義の至難さである。

人間は、みな、同じものだ。／なんといふ卑屈な言葉であらう。（「斜陽」昭22）

神の眼差しを仰ぐまでもなく、人間存在個々の威厳とその原罪の平等を正視すれば、確かに「人間はみな同じ」ようなものかも知れぬ。しかしこれは、人生が現に色々な形で人の数だけ存在し、実に測り難い多様な奥行きをもっているのを量知した上で初めて悟得可能な真理であって、人知一般に照らせば、寧ろ遠く及ばぬ所に在る言葉と言ふべきである。真理は真理だが、高言されるかぎり「ただ人を自殺にかり立てるだけの」（「わが半生を語る」）卑屈な俗言以外の何ものでもない。

神に問ふ。信頼は罪なりや。

（「人間失格」昭23）

信頼とは、自他の関係の中で、自己が他者の不定の未来を信じ、予め決定的な態度をとることをいう。自己の倫理観に従い、未だ不明な他者性を自明なものとして受け容れることである。だから信頼をもつかぎり、自は他に対して常に弱く小さく、つまり盲目である。盲目であるが故に、また裏切られやすい。裏切るのは他者で、傷つき何者も信じられなくなるのは自己である。ならば、罪は自己の盲目にあるのか、他者の裏切りにあるのか。人間存在の罪とは何かを、再度神に問いたい。